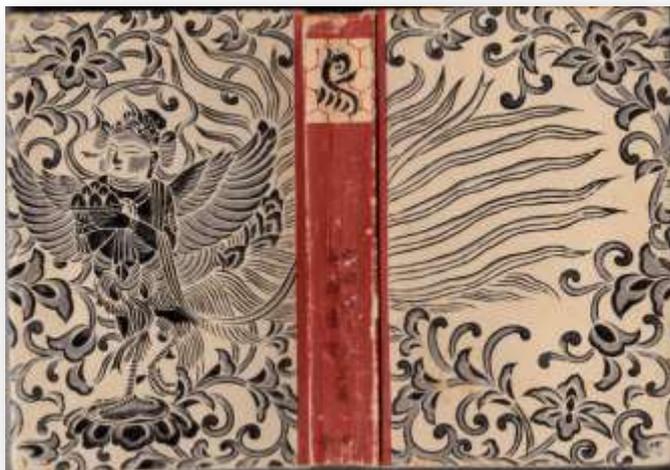


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第18号

(2013年11月)



北光クラブ
自然観察クラブ

内田清之助・金井紫雲著『鳥』(昭和4年1月15日・三省堂発行)

40 鶇 (ひよどり)

鶇の詩趣 秋も末になって、空は瑠璃色に澄み渡り、雑木林の落葉樹が、大方は銅色あかがねに変わった頃、ピーヨピーヨかんだかと甲高い声を立てて啼く鳥の声を聞くことがあろう。それは絵によく描かれたり、歌に読まれたりする鶇ひよどりである。

その形態 鳥学の方からいうと、鶇は燕雀目の鶇科という1科をなし、大きさは8寸3分というから略鳩位はある。蒼みがかった灰色の鳥で、頭部は灰色で末が尖り、一種独特の形をなして居る。後背から腰にかけてはオリーブ色でやや褐色を帯び、風切や尾は褐色で薄い縁があり、尾は割合に長い。多く果実を食べ、南天や棟せんだんの果、椿の花蜜は殊に好む。だから初冬から、早春にはよく人里に現われる。

その生息場所は多く樹木の上で、一二羽で飛び廻ることもあるが、時には十数羽、小さい群を為すこともある。昂奮すると時々その冠羽を立てるが、これがまた面白い。

種類 多く山地に営巢し、秋になると人里近くに出て来る。時に依ると渡りをするものもある。その分布は日本内地をはじめ、支那、朝鮮等で、北海道にも、琉球にも、伊豆七島にも見られるが、胸部の羽毛に幾分の変化があるといわれて居る。そして『蝦夷ひよどり』『琉球ひよどり』など呼ばれ、更に南部琉球に産するものを『石垣ひよどり』、奄美大島に産するものを『奄美ひよどり』、小笠原島付近のものを『小笠原ひよどり』、南硫黄島の『嘴太ひよどり』などと呼ぶ。

(中略)



飼い鳥としての鶇 鶇はよく飼い馴らせば、他の鳥の鳴声を真似したり、笛などで誘いをかけると、冴えた声で唄い出す等、相当に面白いが籠鳥としては少し大き過ぎるが難としてある。併し、この鳥は随分古くから人に飼われて居たと見え、いろいろな物語を遺して居る。その中で最も有名なのは、ここんちよもんじゅう『古今著聞集』に出て居る藤原家隆卿の話である。

藤原家隆と鶇 宮内卿の家隆卿は、非常にこの鳥を寵愛しその一羽には『おぎのは』と名を付け、子息の侍従隆祐に預け、一羽は『はやま』と命じておのが手もとに飼っ

て居た。

『おぎのは』は隆祐の手で、住吉の別業に飼われて居たが、よく隆祐に馴れたので、隆祐は非常にこれを愛して居た。ある時、家隆卿は俄かに『おぎのは』が見たくなって、隆祐のもとに使を出し、早速『おぎのは』を伴い上洛せよ、代わりに『はやま』を遣わすといひ送った。



隆祐は父の命とて否むことも出来ない。併し馴れた『おぎのは』に別れるのがつらく、歌を一首これに付けた。

すずしさは山のかげも変らねどなお吹きおくれ萩のうわ風
と。家隆卿これを見て感じ入り、さほどに名残惜しくばなおしばし『おぎのは』手許に置くべしと、また一首の歌を読んで遣わされた。その歌に、

これもまた秋のころぞたのまれぬはやまにかわる萩のうわ風

家隆卿が鶇を愛することの深いのは、なお次ぎの物語を見ても知られる。

その頃、後久我太政大臣家にも、『おもなが』という鶇が飼われて居た。家隆卿が所望されたので、次の歌一首をつけて送った。

いかにせん山鳥のおもながき夜をおいのねぎめに恋いつつぞなく

と。この歌に対して家隆卿がどう返したか、著聞集の著者は『さだめてかえしありけむかし、たずねてしるべし』とて筆をとめて居る。

矢張その頃である。権寺主円慶という僧があった。この僧も鶇を飼って居たが、換羽どきになっても、中々羽が抜けかわらぬをもどかしがり、その鳥をとらえて、毛をつるとむしり取ってしまった。それを聞いた家隆卿、

ひえ鳥をむしりつつみのはたかわらしりすすにしてなおわたるなり

と一首を詠じて壬生の辻に立てた。家隆卿は余ほど鶇が好きであったと見える。

名妓と鶇 徳川時代になっても、鶇は中々流行したと見えて、馬文耕の『東都著聞集』という書に、深川の名妓米蝶が、鳥鶇を放したことを載せて居り、三浦屋の薄雲の伝の中にも、山本の勝山が鶇を放したということが記してある。



鶇の習性 鶇の習性を見ると中々面白い。先ずその食物であるが、これは前にいう通り、山茶花の蜜を好んだり、南天の赤い実を啄んだり、おうち棟の実を食べ、或は他の

木の実にまで及ぼすことがあるが、総じて紅い果実を好むという風がある。此の紅い果実を好むということは、鶉の羽毛や、その周囲の状態から見ても既に好個の画題である。鶉が絵画に現われるのは多く晩秋初冬の風物を以てせられるのは、決して理由のないことではないのである。

それから此の鳥は、非常に伶俐なことである。鶉箱もちなど仕掛けて捕えようとする、中々その手に乗らない。若し鶉につくようなことがあると、逆に身を吊り、自分の体の重みで自然に鶉に離れようとする。これが為めに網などで鶉を捕える時は、鶉網と行って、特別の装置をするのである。

地方へ行くとまだ面白いことが伝えられて居る。それは果樹の種を播くに当り、普通の果実で生えない場合、一旦鶉に食べさせ、糞に交って出た種を播けば、殆んど百発百中であるという。それは鶉の嘴に依って堅牢な外皮が破れ、胃中の温度と水分に依って発芽が促成されるからであろう。何人の経験に依るのであろう、面白い話ではないか。

(中略)

鶉の寓話 なお文学には関係がないが、此の鳥に関する寓話が『田舎荘子』という書に載せてある。面白いから左に抄出しよう。

鶉、小鳥どもを集めて謂て曰う。汝等畑の作物につき、又は庭このみの果を喰うたり、いらざる高声をして友を呼びさわぐに依って人その来り集まるを知って網を張り黏もちを置くなり。我、冬になり山に食物なき時は人家に來りて縁先にある南天の実を食えども、亭主知ることなし。あまりおかしさに立ぎまに大きな声してれいいうてかえるなり。万一黏にかかりても、少しもさわがず、身をすくめてそつとおおのけになりてぶらさがり居れば、『はご』は上に残り身ばかり下に落つ時、こそこそ飛んでゆくなり。汝らは黏にかかりたる時、あわてさわぎ、はためく故に、総身に黏をぬりつけて動くこともならずして捕えらるる不調法の至りなりと、才智がまく語る。

末座みそざいにありたる鶉鶉という小鳥、笑つていふ。人は鳥よりも、かしこくて、一たびこの手にあいたるものは、下にも細き『はご』を置き、例の如くぶらさがりて、下へ落つれば、下なる『はご』をせなかにつけおもしろいもよらぬことなれば、さすがの鶉も、あわて噪ぎ給う故、総身に黏をぬりて捕えらるるはおなじことなり。

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。

人物紹介・内田清之助

明治・大正・昭和期の鳥類学者。

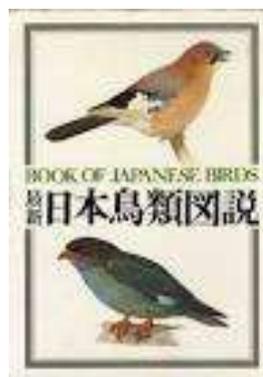
1884（明治17）年12月1日、東京都中央区銀座（当時は東京市京橋区）五丁目角のたばこ屋に生まれる。昆虫採集が好きな少年で、動物好きの趣味を活かし将来は動物学者になる心づもりで、旧制第一高等学校の二部乙類に入学。同校では英国留学から帰ったばかりの夏目漱石から英語を習い、熱心な漱石ファンになったという。理科大学動物学科に進むつもりがはっきりしない理由で、東京帝国大学農科大学獣医学科に進学、1908（明治41）年に卒業、獣医学士。続いて大学院では寄生動物学を専攻。ところがまたひょんなことから鳥の学問に踏み込むことになり、卒業後は鳥学者として鳥の研究に専心。1918（大正7）年、農商務省による「狩猟法」の改正に伴い、「農林業上有益な野生鳥獣の保護繁殖と狩猟鳥獣の利用増殖」を目的とした「鳥獣調査事業」が始まると、内田はその総括・指導のため農商務省技師に任ぜられた。以後、農林省鳥獣調査室長など歴任。1925（大正14）年、論文「Studies on amblycerous mallophaga of Japan（日本産隠角羽虱類の研究）」により農学博士。ツバメの研究により、農業害虫の増大防止に鳥が貢献していることを早くから呼びかけ、鳥類保護運動の始祖といわれる。

1912（大正元）年、東京帝国大学動物学教室の飯島魁（いさお）によって日本鳥学会が始められ、教え子の内田はその3代目会頭も務めた（1946-1947年）。また1934（昭和9）年には中西悟堂の「日本野鳥の会」設立にも後押しをする。

半世紀以上も野鳥の保護の必要性、自然破壊に対する警告を叫び続ける一方、鳥学、鳥類保護を一般に普及するという仕事で、「鳥の博士」として知られた。日本鳥学会名誉会頭、日本動物園協会顧問なども務める。研究書の他に翻訳書や『猫の恋』『卵のひみつ』『動物随筆選』などの随筆も多く、一般への知識普及に尽くした。

主な著書に『日本鳥類図説』全3巻（1912～15年、警醒社書房）、『鳥類講話』（1917年、裳華房）（1925年、『鳥学講話』となる）、『鳥類学50年』（1958）、『鳥と旅』（1973年、芸艸堂）など。（詳細は次ページ以降を参照）

1975（昭和50）年4月28日、心筋梗塞のため死去。90歳。



著書目録

- “A Hand-List of Formosan Birds” (英) 「台湾鳥類目録」 (1912年) 大正元
- 「日本鳥類図説」上巻・下巻・続編 (1914～7年、警醒社書房) 大3～6
- 「簡明家畜寄生動物学」 (1915年、有隣堂書店) 大4
- 「鳥類講話」 (1917年、裳華房) (1926年、「鳥学講話」となる) 大6
- 「科学世界鳥学講話」 (1922年、中文館書店) 大11
- 「巣箱給与に依る鳥類保護」 (葛精一共著) (1922年、農商務省農務局)
- 「四季様々の鳥の研究」 (1925年、文化生活研究会) 大14
- 「日本鳥類図説 増訂版」上・下・続 (1925～7年、警醒社書房) 大14～昭和2
- 小鳥の飼ひ方叢書「飼鳥七講 上・下」 (文化生活研究会)
- 「日本鳥類図譜 増訂版」上・下 (1927年、警醒社書房) 昭2
- 「鳥」 (金井紫雲共著) (1929年、三省堂) 昭4
- 「応用動物図鑑」 (1930年、北隆館) 昭5
- 「鳥類生態写真集」全2巻 (下村兼二共著) (1930～1年、三省堂) 昭5～6
- 「原色鳥類図譜」 (下村兼二共編) (1932年、三省堂) 昭7
- 「野鳥禮讃」 (1937年、科学主義工業社) 昭12
- 「脊椎動物体系 鳥類」 (1937年、三省堂)
- 「鳥と獣」 (1941年、芸艸堂) 昭16
- 絵による自然科学叢書「鳥と巣」 (1941年、大和書店)
- 「渡り鳥」 (1941年、岩波書店)
- 「旅と鳥」 (1942年、芸艸堂) 昭17
- 「四季の鳥」 (1942年、大日本出版)
- 「日本の鳥」 (1943年、講談社) 昭18
- 「大東亜鳥類図譜〈第3,4輯〉」 (1944年、平凡社) 昭19
- 「隨筆雁風呂」 (1946年、光文社) 昭21
- 「虱」 (1946年、芸艸堂出版部)
- 「ばーど ロアー季節の鳥」 (1947年、日本出版) 昭22
- 「渡り鳥 (少国民のために〈第7〉)」 (1947年、岩波書店)

- 内田清之助選集〈第1巻〉「鳥」(1948年、真野出版) 昭23
- 新科学選集「日本の鳥」(1949年、文祥堂) 昭24
- 「日本昆虫図鑑—学生版」編集(1949年、北隆館)
- 「狩猟鳥読本」(1949年、全日本狩猟倶楽部)
- 「新篇 鳥学講話」(1949年、暁書房)
- 「新編 日本鳥類図説」(1949年、創元社)
- 「鳥」(1949年、創元社)
- 「学生版 日本動物図鑑」第3版(1950年、北隆館) 昭25
- 「季節の鳥」(1950年、縄書房)
- 「ツグミ渡るころ—動物随筆選」(1951年、創元社) 昭26
- 全集「野の鳥の生態〈中、下〉」(仁部富之助共編)(1951年、光文社)
- 創元文庫「鳥」(1952年、創元社) 昭27
- 原色図鑑シリーズ「日本の鳥」(1952年、創元社)
- 「生物ごよみ」(1952年、筑摩書房)
- 創元文庫・エクスタイン著「鼠夫婦一代記」(翻訳)(1953年、創元社) 昭28
- 観察と実験文庫「めずらしい鳥・獣」(戸田達雄共著)(1953年、同和春秋社)
- 「鳥博士と魚先生」(末広恭雄・共著)(1954年、筑摩書房) 昭29
- 「原色動物図鑑〈〔第2〕〉水棲動物篇—学生版」(1954年、北隆館)
- 「原色幼年動物図鑑」(岡田要・共監修)(1955年、北隆館) 昭30
- 現代教養文庫「野鳥物語」(1957年、社会思想研究会出版部) 昭32
- 「鳥の歳時記」(1957年、東京創元社)
- 「鳥類学五十年」(1958年、宝文館) 昭33
- ガスタフ・エクスタイン著「野口英世伝」(翻訳)(1959年、東京創元社) 昭34
- 創元選書「天然記念物・鳥類篇」(1960年、東京創元社) 昭35
- 「鳥たち」(1961年、三月書房) 昭36
- 「鳥のむかし話」(1961年、大日本図書)
- 「新日本動物図鑑〈上・中・下〉」(岡田 要・内田 亨共監修)(1965年、北隆館) 昭40
- 「鳥・獣・人間」(1970年、土筆社) 昭45

- 「鳥—私の自然史」 (1971年、三省堂) 昭46
- 「浮世絵版画の鳥」 (檜崎宗重共著) (1974年、芸艸堂) 昭49
- 「最新 日本鳥類図説」 (1974年、講談社)
- 「鳥と旅」 (写真・高野伸二) (1978年、芸艸堂) 昭53
- 科学随筆文庫〈19〉「動物とともに」 (1978年、学生社)
- 少年少女科学名著全集 24「卵のひみつ」 (板倉聖宣 共著) (1979年、国土社) 昭54
- 「全集日本動物誌 (8)」 (1982年、講談社) 昭57
- 「渡り鳥」 (1983年、築地書館) 昭58
- 「全集日本野鳥記 (2)」 (1985年、講談社) 昭60
- 「原色動物大図鑑」全4巻 (黒田長禮共著) (1986年、北隆館) 昭61
- 「鳥類学名辞典」 (島崎共著) (1987年、東大出版会) 昭62



※ 中西悟堂著『野鳥と共に』巢林書房版の巻末に、同書房発行の内田清之助の広告があり、『画と鳥』『鳥学講話』『四季の鳥』『野鳥礼讃』『日本鳥類生態写真図集』が価格と送料も添えて記載されている。

※ この他にもたくさんあると思われませんが、分かる限りでリストアップしました。増改訂版も含まれます。重複等ご容赦。

表紙の本の図柄：「迦陵頻伽・迦陵頻迦 (かりょうびんが)」

上半身が人で、下半身が鳥の仏教における想像上の生物。サンスクリットのカラヴィンカ (kalaviṅka) の音訳。『阿弥陀経』では、共命鳥とともに極楽浄土に住むとされる。

殻の中にいる時から鳴きだすとされる。その声は非常に美しく、仏の声を形容するのに用いられ、「妙音鳥」、「好声鳥」、「逸音鳥」、「妙声鳥」とも意識される。

一般に、迦陵頻伽の描かれた図像は浄土を表現していると理解され、同時に如来の教えを称えることを意図する。中国の仏教壁画などには人頭鳥身で表されるが、日本の仏教美術では、有翼の菩薩形の上半身に鳥の下半身の姿で描かれてきた。敦煌の壁画には舞ったり、音楽を奏でたりしている姿も描かれている。

(by ウィキペディア)

奥日光・秋のハイキング～社山～
11月3日（日） 天気・晴れたりくもったり

紅葉たけなわの日光いろは坂の大渋滞を避けるため、まだ暗い朝5時半集合の早出でしたが、日光宇都宮道路を下りると早速車の長い列。それでも7時半には中禅寺湖畔の駐車場に車を置いて、湖の彼方に聳える社山目指して歩き始めていました。

イタリア大使館別荘記念公園からさらに、湖水沿いの疎林の中の道を進みます。今年の紅葉は色が冴えないそうですが、それなりの彩りを楽しみつつ、一面に散り敷いた枯葉をかさかさとして踏みながら、八丁出島（青い湖面に突き出た紅葉のモザイク模様の半島の風景はお馴染みですね）の付け根も通り過ぎ、歩き始めて2時間、阿世瀉に着き、湖を背に阿世瀉峠への登りになります。峠からははいよいよ社山に向って本格的な登りに。

中禅寺湖の南岸に聳える社山（1827m）への登りは主にササに覆われた眺めのよい尾根道で、北側に中禅寺湖とその向こうに奥日光の風景が箱庭のように広がり、南側には足尾の谷と鉾毒で荒れた松木沢とそれを囲む山々の風景が見渡せます。上り下りの繰り返しで、息を切らして折々にひと休みしながらこの風景を飽きず眺め、2時間ほどで山頂に着きました。やっとお楽しみのお弁当、大人たちには本格ドリップコーヒーのサービスも。そして何より、紅葉の展望がごちそうです。

帰りは同じ道を景色を見下ろしながら引き返します。

夏休みに日光小学校へ転校した佐々木君も一家で参加してくれ、疲れを知らない子どもたちの歓声で終日にぎやかな道中でした。



中禅寺湖畔にて
目指す社山を背に

※ 参加者（敬称略）

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、鈴木若菜、平井亜湖・裕子、小島美穂、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計13名）

《旅の記録》

鹿沼 6:00——土沢——(日光宇都宮道路)——清滝——いろは坂——立木観音◎
7:30……阿世湯 9:10……阿世湯峠 9:30……11:30 社山(昼食) 12:30……
阿世湯峠 13:40……阿世湯 14:00……立木観音◎15:30——清滝——
(日光宇都宮道路)——土沢——16:30 鹿沼

✿ 開花していた植物

特になし？

✿ 見た樹木

ブナ、イヌブナ、クマシデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、シロヤシオ、
ナツツバキ、トウゴクミツバツツジ、オヒョウ、ノリウツギ、マンサク、ツリバナ、
アオダモ、イタヤカエデ、カツラ、ミネカエデ、コメツガ、ヒノキ、
オオイタヤメイゲツ、ハリギリ、ダケカンバ、ツルアジサイ、サワシバ、
コシアブラ、リョウブ、ナナカマド、コハウチワカエデ、ホオノキ、
オオバアサガラ、ウダイカンバ、ミズメ、アズキナシ

✿ 見た鳥、聞いた鳥

コガラ、エナガ、オオバン？、コゲラ、ヤマガラ

✿ 日光・社山の思い出写真館



ヤッホー！
思わず叫びたくなる
阿世湯峠にて



ひとしきり登ってひと休み
絶景かな～♪

虫のいろいろ





足尾方面の眺め



↑山頂付近からの眺め
竜頭の滝、戦場ヶ原、
湯滝も一望できる

←白根山も見えた



稜線を歩く展望の山旅



キノコの
いろいろ



阿世湯に下りてきました
後は帰るだけ



※ 参加者からいただいたおたより



日光・社山ハイキングの感想

日光小学校5年 佐々木伸二

7月に日光に引っ越して丸3カ月。日光に行ってから初めての山登りはスタートから日光の山でした。

11月3日の朝は6時起き。起きて10分くらいで出発。明らかに寝坊でした。表通りに出ると道はガラガラ。スピードを出して行くと清滝で渋滞にぶつかりました。回り道をして待ち合わせ先のコンビニへ。鹿沼からの阿部さんたちは渋滞で遅れているようでした。5分ほど待ってみんながやって来ました。早速休憩が始まりました。平井さんや鈴木さんには久しぶりに会えたのでとてもうれしく思いました。ひとつ残念なのはハイキングが雨で延びてしまったため山口さんが奈良に帰ってしまいなかったことです。せっかくなので一緒に山登りをしたかったのですがやむを得ません。渋滞の中に入りいろは坂へ。意外にも混んでいませんでした。コンビニを出て20～30分。立木観音に到着。目指す社山ははるか先。立木観音を出て15分、イタリア大使館別荘記念公園を通過。朝っぱらだから人もまばらです。ゲートを通り過ぎ阿世瀉の分かれ道まで1時間20分ほどでした。次の阿世瀉峠まで急な登り坂を20分ほど歩きました。その先は峠の細い道を歩くと右は中禅寺湖、左は足尾や桐生の方も見えました。上がるに連れて竜頭の滝や戦場ヶ原のほか白根山も見え始めました。そうすると男体山の美しさは言うまでもありませんでした。その先ニセ山頂もたくさんありましたが、峠から1時間半ほどで社山山頂に着きました。山頂は足尾の眺めは最高でした。下りは止まらなくなりそうになりながら下りました。イタリア大使館別荘記念公園の手前ではサルの大群とシカの親子でした。子ジカはこの春生まれたようです。元気に育つといいなと思いました。サルのほうは人の気配を感じてなだれを打って逃げていきました。でも3匹ほどのんびり木の葉を食べていました。イタリア大使館の記念公園に着いた時は足首がものすごく痛む上足はガクガク。もう限界かと思った時に立木観音に着きました。着いたら、疲れがあまりにもたまっていたのでベンチに倒れ込んでしまいました。おやつをかじりながら遠くを見ると社山ははるか先に見えました。それを見ると「よく登ったなあ」と感じました。みんなとは立木観音でバイバイ。いろは坂を下ると清滝で渋滞でしたが、20分ほどで家にたどり着きました。楽しい1日でした。

① “カヌマ大学” アップロード

カヌマ大学とは、「自分のまちを愛する人たちが、そのまちでの生活や文化を考え、サブカルチャーや地元ネタをテーマとした授業を楽しむ場」として今年設立された市民大学で、ほぼ毎月、体験型のユニークな授業を楽しむ手作りの講座を展開しています。

その第3回授業に講師を依頼され、8月3日（土）15時より「黒川水族館～自宅水族館のつくり方～」として、十数名の参加者をお迎えしました。おなじみの「水族館」を公開し、皆さんに身近の黒川水系の水生生物を見ていただきました。この模様は鹿沼ケーブルテレビも取材に来て、「鹿沼トピックス」で後日放映されました。その画像をYouTubeにアップロードしましたので、ぜひご覧ください。また「カヌマ大学」のホームページにも紹介されています。

② かぬま子どもアーツカレッジ2013

放課後子ども教室のひとつ「わくわくおもしろ教室」では、ほぼ毎週火・金曜日の午後、文化活動交流館に放課後の小学生が集まり、いろいろな遊びに楽しく時間を過ごしています。この場を使って、特定非営利活動法人表現遊び開発教育研究所ママが「かぬま子どもアーツカレッジ2013」として年10回の計画で様々な体験教室を展開中です。その第4回「自然観察会①河川の生き物など・屋外観察会」に依頼されて講師を務めました。当初10月25日の予定でしたが、雨天で延期となり、11月1日（金）15時より、集まった子どもたちを対象に水生生物教室を開きました。日の暮れるのがますます早まって、近くの水路で魚捕り、というわけには行かず、水槽に用意して行った生き物を観察したり触ったりの内容となりました。



わたらせ溪谷鐵道・秋の小さな旅
～旧足尾線のあとを訪ねて～

…足尾線が開通したのは大正元年のこと。明治時代には足尾銅山から産出される銅は、馬車や鉄索を利用して細尾峠経由で日光方面へ運ばれていたが、桐生方面からの鉄道敷設が悲願となり、(中略)大正元年12月、足尾駅までのほぼ全線が開通した。

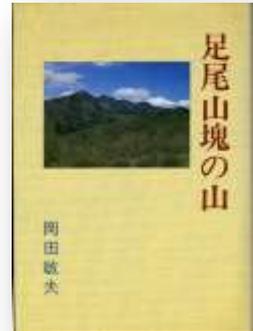
桐生～足尾駅間の距離は44キロ、標高差は約650mもあって、勾配はきつく、急カーブやトンネル、鉄橋の連続で、悪路の異名を持つ路線であった。所要時間も開業当初は3時間もかかったという。機関車は3070型が使われたが、昭和9年からC12型が登場し、足尾線の花型蒸気機関車として貨物や旅客輸送に大活躍する。当時は足尾町の人口も多く、文字通り山間の鉾都を支える動脈の役割を果たしていた。

その後、経済成長時代に入って、自動車が普及してくると、鉄道も次第に合理化を迫られ、昭和34年には蒸気機関車からディーゼルカーに変わり、昭和48年には足尾銅山の閉山という大打撃を受けて、ついに赤字線に転落し廃線対象となってしまった。

岡田敏夫『足尾山塊の山』(昭和63年7月20日・白山書房発行)より

※ 旧国鉄足尾線はその後第三セクターによる鉄道存続が決まり、現在、「わたらせ溪谷鐵道」として営業運転が続いています。

かつて銅山の町として栄えた日光市足尾町を訪ね、世界遺産登録を目指す足尾銅山関連施設である足尾精錬所遺構、本山坑跡、古河橋等を見学しましょう。また間藤駅に車を置いて「わたらせ溪谷鐵道」に乗車し、花輪駅まで鉄道の旅を楽しみましょう。花輪には木造の旧小学校校舎を利用した郷土資料館(無料)があります。



日 時：11月17日（日）AM6:00 北小西門集合（解散はPM5:00 頃）
行 程：鹿沼——土沢——清滝——間藤駅……古河橋……足尾精錬所遺構……
本山坑跡……間藤駅＝花輪駅……旧花輪小学校記念館……花輪駅
＝間藤駅——清滝——土沢——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、図鑑、
1/25,000 地形図は「足尾」

会 費：おとな500円、子ども250円、

他にわたらせ渓谷鐵道乗車券（間藤—花輪間、

おとな640円×2、子どもは半額）、

その他の施設に立ち寄り入場料がかかる場合もあります。

今年度初参加の方は保険料800円(3月まで)。

申し込み：11月15日（金）までに、

チャレンジスクール申込書で北光クラブ、または阿部まで。

問合せ：電話 090-1884-3774（阿部）

☆ 山口さん奈良に帰る ☆

当クラブで約2年間ご指導いただいた山口龍治氏が、定年退職に伴い、10月に郷里の奈良県へ帰られました。同氏には昆虫から始まって植物や菌類その他の生物全般、また考古学に至るまで豊富な経験に基づく貴重なお話を伺うこと度々で、観察会や山行が非常に充実したものとなり、大変お世話になりました（詳細は月報第13号もご参照ください）。その間の感謝の気持ちを込めて、10月17日（木）、戸張町あさやにてささやかな送別会（最終講義含む）を開催しました。子どもたちも含め大勢の皆様のご参加をいただいて、にぎやかなお別れ会となりました。その3日後に予定されていた日光・社山行が雨のため延期になり、お別れハイキングができなかったのは残念でした。



子どもたちも大勢参加した
送別会の様子

最後に寄せて

鹿沼市立北小学校には北光クラブがあり、自然観察クラブと連動しています。月1回、ハイキングや登山を兼ねて自然観察が行われ、夏休み中には、昆虫観察や魚釣り教室が開かれます。自然好きの子供達にとっては恵まれた学校です。これには、自然ナチュラリストの阿部良司先生が校区内に居られたことは言うまでもありません。そして、多くの人の理解と協力も不可欠なことだと思います。北小がモデル校であり、このような活動が全国に広がっていくことを願っています。

自然観察会では、関西にはなく標本でしか見たことがない多くの植物を学びました。鹿沼生活の最後のときであり、生涯忘れられない思い出です。鹿沼学舎も忘れられません。月報には、植物では奥深い領域に少し入ったところであり、さあ、これからだという時に鹿沼を離れるのは忍びありません。私を受け入れて下さった阿部先生やクラブ員の皆様との活動は、とても有意義で楽しいものでした。鹿沼に来て15年以上になりますから、もっと早く阿部先生と出会いたかったです。第二・第三の阿部先生が誕生し、両クラブが益々盛り上がっていくことを期待しています。

10月17日には、私の為に送別会を行って下さり、お忙しい中、多くの方々がかけて下さいました。月報の文面をお借りして、厚くお礼申し上げます。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

又、奈良へお越しのときはご一報を。

住所 〒639-0276 奈良県葛城市當麻92-24 携帯 080-1287-8013

(山口龍治)



山口さんの昆虫コレクション
茂呂山で捕れたチョウとガ



山口さんの“最終講義”
鹿沼滞在中の昆虫コレクションを手に

☞ 読者からいただいたおたより ☜

前略

過日は御多忙のところ月報を御送り頂き、真にありがとうございました。又、第16号嬉しく楽しく拝読致しました。中西悟堂は何回か田部先生と山行を共にし、詩も綴っております。御承知の通り「かみなりさま」の文中の“蛇”のエピソードは、まさに阿部様の御手紙の「生き生きと交流する昔日の光景」ですね。そういったようなことで今後共貴誌で間接的にでも田部重治に触れられる事がございましたら、御恵送賜わりますれば幸いと存じます。(研究会では関連資料も出来る限り蒐集を心がけてますので) 先ずは乱筆乱文にて。 草々

(田部重治研究会・白坂正治)

本誌第13号で田部重治を取り上げたのがきっかけで、専門に研究している方から幾度かお手紙や原稿やといただいています。中西悟堂を特集した第16号に、「浅学の身ながら“めくら蛇に怖じず”で、相変わらず大家を次々と取り上げていますが、時代が近いこともあってか、見覚えある名前が意外なところで結びついているもので、行間に異分野の人々が生き生きと交流する昔日の光景が想像され、古書のページを繰るのなかなか興味の尽きない作業です。」と最近の感慨を書き添えてお送りしたところ、上のようなお返事をいただいたのでした。



生き物係の手帖・5

ヒヨドリ

この夏、機動パトロール隊のボランティア活動から帰ってきた息子が、小鳥の雛を連れてきた。「巣立ちした雛は親が面倒見るからそのまま置いてくればいいんだよ」と、NHKラジオの「夏休み子ども科学電話相談室」を聴いている僕は、日本野鳥の会の先生のいつもの答えを引き合いに出した。鳥の種類は大きさからしてヒヨドリかムクドリだが、いずれにしても巣立ちするにはまだ小さ過ぎる。空腹であればか

わいそうだと思い、播り鉢で青菜を播って、7分の播り餌と水を混ぜ、竹べらに載せて与えた。最初は口を無理矢理開けて餌を与えるが、すぐに味を覚えて自分で口を開けるようになるので、1時間に1度くらい、竹べらに播り餌を載せて差し出してやれば良いのである。

数日して、野生に戻す訓練、と思い籠の外に出して見た。すると、やはり巣立ちできる大きさには成長していないらしく、飛び立つことはできない。さらに数日後、子どもたちが異変に気が付いた。翼が下がっているのである。よく調べてみると、翼が途中で切断していて傷口が見える。これでは野生で生きていけない。

そのうち、「ビー」という声を発したのでヒヨドリとわかった。初夏になると時々、庭先でこのヒヨドリの若鳥の声を聞くからだ。

実は我が家ではもう1羽、野鳥を飼っている。昨年の春、坂田山在住の工藤さんが持ち込んだ、自宅近くの公園で子どもたちが拾って遊んでいたというコゲラの子だ。わが家に来た時には、すでに羽をふくらませて目を閉じ、瀕死の状態だった。「これは無理だよ」と言いながらとりあえず水を与えると、飲んだ。単に喉が渴いて弱っているだけならいけるかも、と思い、青菜と落花生を播り鉢で播って、7分餌を混ぜて与えた。

うちの子は小鳥の世話ができると喜んでいる。でもどうせ、飛んで逃げられるようになる頃には飽きるだろうと思っていた。しかし、そのコゲラも未だに、外に出してもネズミのように地べたを逃げ回るだけで飛ぼうとしない。

ヒヨドリは明らかに、巣立ちする大きさに成長していなかったもので、早々と親鳥に見放されたのではないかと思う。

コゲラの場合はどうだろう。本来野鳥は巣の上で羽ばたきの練習をして筋力をつけ、少なくとも飛び立つだけの力は身につけて巣立ちするものだ。巣立ちしても、最初のうちは多少飛べたにしても下手くそで飛び立ちが遅いから、多くの雛鳥はこの段階で猛禽や獣の餌食となってしまうらしい。たしかにネコなど、上手なやつは、スズメの成鳥さえ巧みに捕まえるというから、雛鳥なら無論だろう。しかしこのコゲラのように人の子に捕まってしまう、というのはどうなのだろう。僕はこの子も、外見ではわからないが身体的な障害を持っているのではないかと思う。

巣立ちした若鳥のうち、成鳥になれる割合はある程度わかっているかもしれない

い。しかし、身体的障害を持っている雛鳥の割合はどうなのだろう。そして障害を持つ雛が生まれる原因はなんなのか。

法律によって野鳥は飼育できないことになっている。たとえ飛べなくて保護された鳥でも。これを飼育してよいということになると、野鳥を故意に傷つけて飼育しようとする不埒者が出るやもしれぬ。

したがって飛べない鳥は心に痛みを感じても自然に帰すか、あるいは人に知られぬように静かに飼育を続けるしかない。

ただし、街中の家の中から、ウグイスやコマドリやオオルリやヒガラやウソなどのさえずりが聞こえれば、“当局”に摘発されるのは当然だし、積極的に摘発してほしいものだと思う。

中学の時、登校の途中、今宮神社のかどの大ケヤキの下でムクドリの子を拾った。当時、理科の熊田先生がやはりムクドリの子の世話をしていたので、こいつの世話も頼もうと思って理科室に持って行った。すると先生は羽毛をかき分けて何やら調べている。「ほら、見てみい」と差し出したムクドリの子の皮膚には、まんまるで真っ黒い大きなダニがびっしり付いていた。やむなくそのまま逃がしたが、今考えればダニを駆除する薬もあったのだろうと悔やまれる。このムクドリも、親から見放されたのだろう。

飛べない鳥を保護して飼育することは、野良猫に餌を与えるのと同じで動物愛護という観点からいけば正しいかもしれないが、その行為は鳥類の保護にも自然保護にも、残念ながらつながらない。野鳥の捕獲を禁止にすることは鳥類の保護になるし、野鳥の飼育も、それを禁止にすれば捕獲の必要性がなくなるのだから、鳥類の保護につながる。

しかし、鳥類の保護のために最も重要なことは、野鳥の生息する自然環境、しかも広大な自然環境を、さらには多様な自然環境を守ることである。そしてその先には、地球環境をいかに守るか、という途方もなく大きな問題がのしかかっている。

(阿部良司)



☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	内田清之助・金井紫雲著『鳥』	2
	人物紹介・著書目録	5
活動報告	奥日光・秋のハイキング～社山～	9
活動報告あれこれ	“カヌマ大学”アップロード・かぬま子どもアーツカレッジ 2013	13
次回案内	わたらせ渓谷鐵道・秋の小さな旅～旧足尾線のあとを訪ねて～	14
山口さん奈良に帰る		15
読者からいただいたおたより		17
生き物係の手帖・5	ヒヨドリ	17

会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。
また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。(無料)
確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、
ご自宅まで郵送いたします。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第18号

2013年11月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ



検索